

科学研究の最前線を美術館に!

馬淵 晃 まぶち・あきら

デザイナー / アートディレクター

「芸術と科学の婚姻」 — 展覧会開催までのいきさつ —

2011年10月15日から12年1月9日までの約3ヶ月間、川崎市岡本太郎美術館で「芸術と科学の婚姻 虚舟—私たちは、何処から来て、何処へ行くのか」と題されたユニークな展覧会が開かれました。

私とその展覧会に関わるようになったのは、岡本太郎美術館からの、ある新進アーティストの展覧会のための企画参加要請でした。その作家の作品制作の基本は油彩によるものですが、最終的に表現されたものは素材の枠を越えた不思議なエネルギーを放つもので、制作のためのイメージングづくりといえば、例えばビックバン宇宙論、素粒子論、分子生物学といった様々な科学的思考に対する興味と霊的な感覚を同じ次元で取り込んで独自の哲学を創り出し、それを創作のエネルギーに換えるといったような独特なものでした。そのために普通の展覧会形式ではイメージを伝えるのは難しいと判断され、作家の推薦もあって私に話が回って来たからなのです。もともと科学画像に強い興味を持っていた私は、研究を進めるうえでの科学者のイメージの在り方にも同じように興味を持っていて、科学者と芸術家のイメージの果実を美術館という空間に置いてみたら面白いのではないかと閃いたのでした。さらにゲストキュレーターの提案による、作品制

作に科学的な手法を駆使するアーティストの参加が実現したことで空間的一体感が強まり、その結果、芸術作品と科学画像が渾然一体となった不思議空間のイメージが制作スタッフ間で具体的に共有できるようになり「芸術と科学の婚姻」を基本コンセプトとしたこの企画が具体的にスタートしたのでした。

画像をどう見せるか — 科学展示について —

今回の展覧会の中心になる画家の基本テーマが「いのち」であることから、科学展示のテーマは「宇宙・脳・生命科学」に関するものとしました。「いのち」を科学のジャンルとして俯瞰すると、「生命は何処から来たのか?」「私たちが生かすものは何か?」「私たちの感情は何処から来るのか?」というイメージがおのずと浮かび上がってくるからです。具体的には「宇宙—私たちは何処から来たのか」「脳—私たちが生かすもの」「細胞—私たちが生かすもの」を基本コンセプトに据え、最新の研究成果を反映したアートとしての科学展示を試みることにしました。その上で、それぞれのジャンルに精通し、かつサイエンスコミュニケーションに何らかの形で関わりを持つ人にコーディネーター役を依頼し、宇宙部分はIPMUと国立天文台に、脳と細胞部分については理化学研究所の協力を得られる体制が出来上がりました。

宇宙展示については、コーディネー

ター役を中心にIPMUの関係者、国立天文台、東京大学に所属しサイエンスコミュニケーターとしても活動している研究者達との議論、今回の展示の方向性を掴むために制作されたIPMUに所属する研究者たちへのビデオインタビューの分析などから、宇宙背景放射を基準に、それ以後の電磁波で具体的に観測出来る部分と、それ以前の宇宙の始まりに関する部分の3層に分け、今回の展覧会では宇宙の始まりに関わる科学者のイメージそのものに力点を置こうという事になりました。例えば、展示期間以後に放映されたものですが、NHK BSプレミアムの科学情報番組、コズミックフロント「ホーキング博士の宇宙137億年の物語」のエピソードの一つである村山機構長と研究員の黒板を前にした熱い議論などに見られるような、観測や実験によってではなく純粋に理論によって宇宙の始まりの謎にこだわる研究の現場を、そこでの科学者のイメージそのものを、展覧会会場にアートとして再現してみようということです。それは人間の持つ想像力や創造力の素晴らしさとその可能性を表現することであり、個々の人間の持つ多様な能力の不思議さを表現することでもあります。未知のものにチャレンジし能力の限りを尽くす人間の姿に人々は感動し、理屈抜きで興味を持ったりするのではないかと考えたからなのです。

そこで表現される数式や図形、概念図、論文などなどは一般人には到底理



宇宙ゾーンの展示。サイズは天地250 cm×左右1800 cmと巨大なもの。

写真提供/川崎市岡本太郎美術館

解不能なものです、人間の脳とは不思議なもので、たとえ難しい数式であってもそれを形として認識し、面白いと感じたり、美しいと感じたり、そこから様々なイメージを広げたり、インスピレーションを得たりすることが出来るのです。科学の世界の論理による解説は、いくら平易に、あるいは解りやすいように色々なアナロジーを用いての解説であっても、一般の人々は、その科学特有の論理ゆえ拒否反応をおこしやすく、中々受け入れてもらえないのが現状です。そこで今回は人間のイメージを受け入れる力を信じ、思いきって解説抜きでアートに徹してみようと決断しました。画像それぞれはパーツとしては難しいものであっても、全体の形として「面白い」と受け入れて貰えるような展示表現と空間を模索し、「感覚的理解」を目指しました。アートの感性で、科学のイメージの面白さを提示し、そこから逆に科学に対する多様なアプローチが始まる方向性を試みた訳です。

展示期間中、会場でお客様の反応を

観察したり、あるいは直接お話をする機会が幾度かありましたが、数式や不思議な図形の描かれた黒板を覗き込んだりして結構面白がって見てくださる方が多いようでした。

今回、展示そのものにキャプションとしての科学的な解説（展覧会図録には収録）を省いた代わりに、詩人(科学

者でもある)に協力をお願いし、イメージネーションを刺激する別のチャネルの試みもしてみました。その他に会場の導入部には波紋音(はもん)という水琴窟をイメージして作られた珍しい楽器を使った音楽を柔らかく響かせ空間的な暗示も試みてみました。ここでは、宇宙展示のための詩をご紹介します。

太郎の爆発 田中庸介

まず始めに
岡本太郎があったのだ
芸術は爆発だ、
と彼は立ち、大手を広げて言った

ところがそれが見えないのである
時空が膨らみ
夜の長い坂をかけあがった
今となっては

数理宇宙物理学者たちは計算する
柏の黒板に数式を叩きこむ

熱き血潮のように
あらゆる方程式にまみれた黒板の表面
消しては書いて、
書いてはまた消され

いつかそれでも
届くよきっと、太郎のもとへ

わけのわからない、見えない時空のかなた
宇宙をはじめて
きよめた
爆発

Special
Contribution

最後に
—科学情報のこれから—

今回の展覧会は、科学情報のビジュアル化に長い事関わってきて、その情報を伝えることについて感じていた事を実践することが出来た貴重な経験でした。この体験を踏まえ、科学理論そのものを正確に理解することは到底不可能であったとしても、職業柄イメージとして捉えることは出来るので、橋渡しとしてのグラフィックをアートの感性でもって追求していきたいという思いを益々強くいたしました。

科学情報はどんどん難しくなっています。一方、研究の巨大化、生命科学の倫理問題、持続可能な社会構築のために科学が果たす役割への期待の高まりなどに見られるように、一般の人々にその研究の意義を理解していただくことは増々重要となっていて、努力は欠かせません。そしてそのため

の方法論は一つではなく、人間の持つ多様な感受性を考慮する必要があり、「科学と芸術」こそもっと互いに影響し合う必要があるのではないのでしょうか。

今回の試みでは、科学関係、芸術関係の多くの方々にご協力をいただきました。特に宇宙ゾーンの展示では、基本的に見えていないものを形にするための手法をイラストレーターやデザイナーの感性ではなく、科学者のイメージネーション、あるいは研究成果そのものに置きたいという展示の方向性にIPMUの関係者の方々には積極的なご賛同をいただき、さらにそれを掘り下げるべく表現のためのディスカッション、科学者への取材、黒板を使用している現実の議論の再現など多岐にわたり大変なご協力をいただきました。

この協力があってこそ展覧会に奥行きが生まれ、訪れた人々に色々なイメージネーションを与えることが出来たと確信しております。

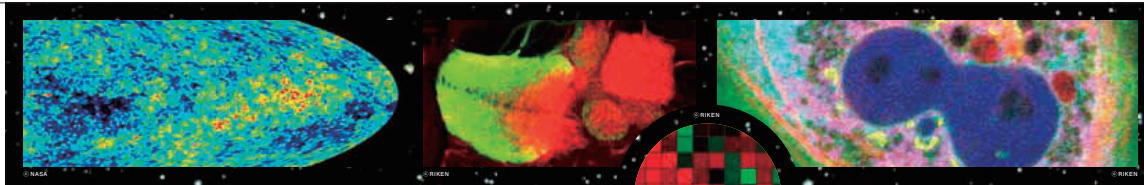
(開催データ)

タイトル：岡本太郎生誕百年記念展
芸術と科学の婚姻 虚舟一私
たちは、何処から来て、何処へ行くのか
主催：川崎市岡本太郎美術館
〒214-0032 川崎市多摩区升形7-1-5
会期：2011年10月15日(土)～2012年1月9日(月)
画像協力：国立天文台、東京大学数物連携宇宙研究機構、理化学研究所
協力：武蔵野美術大学芸術文化学科
総合監修：村田慶之輔(川崎市岡本太郎美術館館長)
総合プロデュース／アート・ディレクション：馬淵 晃(デザイナー／アート・ディレクター)
ゲスト・キュレーター：新見 隆(武蔵野美術大学芸術文化学科教授)



展示会場の一部。奥に理化学研究所にご協力をいただいた細胞ゾーンが見える。

写真提供／川崎市岡本太郎美術館



現代作家9人衆と宇宙・脳・細胞の視覚表現

芸術と科学の婚姻

- 粟野ユミト ●画像提供 国立天文台
- 岩崎秀雄 東京大学
- 植田信隆 数物連携宇宙研究機構
- 杉本博司 理化学研究所
- 多田正美
- 銅金裕司
- 戸田裕介
- 能勢伊勢雄
- 藤本由紀夫

UTSUROBUNE

Where Do We Come From ?
Where Are We Going ?
(Paul Gauguin, Noz Masaki)

Homage to (the Great Avant-Garde Artists),
Ohno Kazuo, Taro Okamoto, Yukio Mishima,
Tatsumi Hijikata, and Tatsuhiko Shibusawa

Homage Paintings by
Takashi Shinozaki, and photos by Eikoh Hosoe

Synchronization with Contemporary 9 Artists
and Visual Echos from Advanced Science Technology of Universe, Brain, and Cell

未来の魂に捧げる鬼才たちの星座

招魂の作家 篠崎 崇 (絵画)・細江英公 (写真) によって蘇る大野一雄・岡本太郎・三島由紀夫・土方 巽・濂澤龍彦



2011.10.15 SATURDAY
→ 2012.1.9 MONDAY

- 開催時間 9:30 - 17:00 (入館は 16:30まで)
- 休館日 月曜日 (1月9日を除く)、11月4日(金)、11月24日(木)、12月29日(木) - 1月9日(木)
- 入館料 一般900円(700円) 高・大学生 600円(500円) 7000円(6000円) 中学生以下無料 (1月は20名以上は団体料金)

- 主催 川崎市岡本太郎美術館 芸術と科学の婚姻実行委員会
- 助成 芸術文化振興基金
- 協力 国立天文台(NAO)、東京大学数物連携宇宙研究機構、武蔵野美術大学芸術文化学科、理化学研究所

岡本太郎の輪

●岡本太郎美術館(岡本太郎)

馬淵晃

●馬淵晃美術館(馬淵晃)

新見隆

●新見隆美術館(新見隆)

交通

●小田急線 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

●バス 川崎駅より徒歩10分

川崎市岡本太郎美術館
Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki
川崎市多摩区橋形7-1-5 TEL. 044-900-9898 <http://www.taromuseum.jp>



川崎市の岡本太郎美術館で開催された「芸術と科学の婚姻 虚舟—私たちは、何処から来て、何処へ行くのか」のポスター

Special Contribution